

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

編集後記

2023年、夏が終わりますが、この夏はいろんなことが「違う」夏でした。まず、初夏には山に毛虫が大発生していました。これは夏には大変なことになるのかなあ、と思っていましたら、森にはマイマイガが乱舞し、街にはクスサンが押し寄せました。お盆を過ぎると夜に鳴くコオロギなどの虫が、今年は賑やかに聞こえます。つまり、一部の虫が異常に多い年だったのです。

また、我が家では細々と野菜を育てていますが、キュウリはあまり実をつけず（雌花がつくとすぐにカメムシに吸われてしまいました。今年はカメムシも多いようです）、カボチャやゴーヤは雌花すらほとんどつげず、ウリ科は実りが悪い年になりました。

それから、こんなに暑さに苦しめられたのも初めてでした。これは実感した方も多いと思います。

地球温暖化は気候変動とともに、着実に私たちを含む生き物の暮らしを変えているのだなあ、と感じます。この先、こういう夏も気象災害とともに増えていくことでしょう。これからの世界に、どんな気持ちで立ち向かえばいいのか、そしてどんなことができるのか、本当に考えなければいけないと思う夏でした。

モリイク vol.26 2023年10月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金



この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証林およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。

コープ未来の森づくり基金レポート

モリイク

M O R I - I K U

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.26
Oct. 2023

森づくりの未来を
明るく変える
林業のカタチ

小規模林業が注目されるワケ



コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

モリイイク

* contents *

- *02 コラム 森づくりのトレンド
未来のための市民による森づくり
- *04 あそびにいこうよ！ 森の中へ
どんぐりはかせの森あそび研究所
- *06 特集
小さな林業で生きていく
- *12 森の癒しをとげる
藤 Hikobayu
- *13 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語
- *14 森のキモイ・キレイ特別編
外来種を入れない捨てない扱げない
- *16 木育essay
春の森で夢のコンサート
～大和ハーブがやってきた～
- *17 Fの森の今を伝える
Fの森通信
- *18 コープ未来の森づくり基金報告
森づくり団体交流 など

Starting Column 森づくりのトレンド

あした 未来のための 市民による 森づくり

もともと森林管理は、代々森林を受け継いできた所有者が、主には木材生産による収入獲得という経済的な目的のために行ってきた行為でした。ところが林業の採算性が悪化し、森林に関心を失う所有者がどんどん増えていき、今は森林組合などに森林管理はお任せ、という状況に陥っています。

これに対して、近年、森林や地域に様々な思いを持つ人々が、自分たちの思いを実現するために新しい森林管理を実践し始めています。その多くは、自分たちの思いを

できるだけ丁寧に実現できるように、個人で目が届くような小規模な取り組みとして森林管理を進めていることが特徴です。私はこうした実践を見聞きする中で、この動きが森林管理に様々な可能性を広げつつあることを実感しています。

一つめは、森林管理＝森づくりの多様性を広げることです。これまでの木材生産を目的とした伝統的な森林管理では、人工林を対象として、マニュアル化された指針を忠実になぞることが正し

いと考えられてきました。一方、生物多様性などの観点から「自然に近い」森づくりを進めるべきではないか、単なる生産の場ではなく人々が親しみ楽しめるような森をつくることが大事ではないかという考えも広がってきました。こうした考えを持つ人々が、実践を通して新しい森林管理を進め始めているといえます。

二つめは、森林と社会のつながりづくりです。これまでの森林管理は、木材生産という目標のもとで林業関係者

の中だけで営まれてきました。しかし、上記のような観点をもち新しい森林づくりの実践は、森林管理と社会をつなごうという意識を強く持っています。一般の人々と森林をつなぐ様々な回路をつくり、新しい社会と森林の関係を提起しようとしているといえます。

三つめは、森林を所有するということの位置づけの見直しです。冒頭に書いたように、もともとは森林所有者が経済目的で自ら管理をする、それが難しくなってきたか

ら森林組組合などにお任せしていたというのが森林管理の姿でした。一方、新たな実践は収入だけに焦点を当てるのではなく、森林の持つ様々な役割を重要と考え、自然に近い、社会とつながりを持った森林管理をめざしており、森林を所有するということの社会的意義を改めて問い直しているといえます。森林所有者と話し合い、納得してもらって、ともに新しい森林管理を進めてきているところも多くあります。

四つめは、収入だけに焦点

を当てるのではなく、と書きましたが、森林管理を経済的に成り立たせていくことは重要であり、新しい形の森林管理に適合したような森林や林産物の新たな活用を工夫してきていることです。二つめの「社会とのつながりづくり」ともリンクして考えていることも重要です。

「コープ未来の森づくり基金」でも、森林管理に新たな可能性を切り開きつつある新しい実践者と手を携えながら北海道の森林づくりのあり方を考え、提起していければと思います。✦



柿澤 宏昭
(かきざわ ひろあき)

北海道大学 名誉教授
コープ未来の森づくり基金 運営委員長
1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。
持続的な森林管理を多様な人々の協働で支える仕組みづくりを、ポスト資本主義を模索しつつ考え続けていこうと思います。
主な著書として『日本の森林管理政策の展開』、『保持林業』など。

森にはおもしろいことがいっぱい！
これから一緒に探しに行こう。
今回はどんぐりに注目だ！



そうくん

はなちゃん

どんぐりをひろってみよう！

いろいろなどんぐり

ミズナラ

北海道でどんぐりといえば
この木だね！



カシワ
かしわもちで
おなじみの
葉っぱ。
海の近くで
よく見る。



どんぐりは
丸くてぼうしが
けば立って
パーマをかけた
頭みたい



コナラ

北海道の南西部に
生えている。
札幌の大谷地より北には
生えないらしい。



どんぐりは
小さくて細くて
かわいい♪

どんぐりは
一番大きく太っちょ。
ぼうしは、平べったいベレーぼうみたい。

アカナラ

もともと
北アメリカの木。
公園や街路樹で
植えられているよ。



どんぐりの芽はどうやっ
て出るか知ってる？秋の
うちに、根を下に伸ばし、
次の春になると、葉っぱ
が上に伸びてくるよ。

森あそびコーナー

どんぐりごま

道具：キリ、革手袋、つまようじ

①キリで穴をあける。
ゆっくり少しずつあけてゆく。



自分の手に穴を
開けないように
←革手袋を！

②つまようじをさす。
長すぎたら適当な長さに切る。



正確に
どんぐりの中心に
穴をあける！

たくさん集めるだけでも楽しいかわいいどんぐり♪
たくさんならべて、どんぐりの背比べ♪
一番大きい、小さいのをさがしてみよう。



どんぐりコロコロ

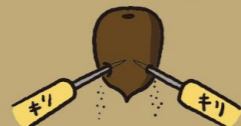
あつめたどんぐりを
坂の上で転がしてみよう！
どんぐりコロコロ楽しい♪



はかせ

ジウさんみたい

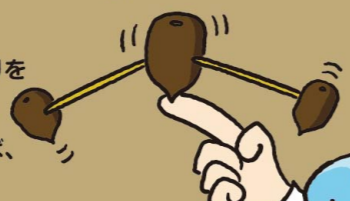
①まん中のどんぐりは、
りょうがわ
ななめ下の両側に穴をあける



②両端のどんぐりには、
どこに穴をあけてもよい。



③3つのどんぐりを
バランスよく
組み合わせれば、
てきあがり！



どんぐり虫をさがしてみよう！

どんぐりをおいておくと、どんぐり虫
が出てくる。穴が開いているどんぐり
は、虫が出ていった後だよ。落ち葉の
下などで冬をこし、つぎの夏におとな
になるんだ。正体はコナラシギゾウムシ
などの幼虫（1cmにもならない小さな
イモムシ）。ソウのはなのような長い
口があるので「ゾウムシ」。長い
口でどんぐりに穴をあけて、
たまご
卵をうみつける。

ひろったどんぐりをよく見てみよう。針の
先くらいの黒っぽい点がついたものがあ
たら、小さな虫が入って
いる。耳をあてると、
どんぐりをかじっ
ている「カリカリ」
という音が聞こ
えるかも？



エゾリスは、どんぐ
りが大好き。冬に食
べるために、あちこ
ちに埋める。時々わ
すれちゃったどんぐ
りが芽を出し、大き
な木にそだつんだ。

エゾリスが埋めるふさが、
どんぐりが芽を出すのに
ちょうどよいらしい。

ここでクイズ！

どんぐりの根っこはどこから出る？（答えは下）



どんぐりのヤジロベエ

道具：キリ、革手袋、たけくし

どんぐり3こ、木の枝か
たけくし2本をよよい。



どんぐりネックレス

道具：キリ、革手袋、ヒモ、ハリガネ、ハサミ

ドンぐりはキリで穴をあけてヒモに通す。
針金いとを糸通しとして使うと良い。



アイデアしだいですてきなネックレス！

どんぐりの本紹介



かがくのも傑作集
どきどき・しぜん「どんぐり」(福音館書店)
こやすすむ(著・イラスト)
★どんぐりについてとでもわかりやすく
まとめられている傑作絵本です。

どんぐりころころむし(福音館書店)

澤口たまみ文 / たしるちさと 絵
★どんぐり虫がいとおしくなる絵本。虫がてくる
ことを嫌がらないで観察するきっかけになるかも。



生かす。



今、道内でも増えつつある、
個人レベルで行う「小さな林業」。
それはどんな仕事で、どんな魅力があるのだろう。
二つの家族型林業家からその秘密を聞いてみた。

🌲 合同会社 Hikobayu
🌐 <https://www.hikobayu.com/>



🌲 合同会社 木もく連 沼田どってこどってこ
🌐 <http://mokumokuren.sunnyday.jp> ✉ mokumokuren.numata@gmail.com

ちいさな林業で

今、少しずつ増えている
「小さな林業」って
なんだろう。
どんなことができるんだろう。
森づくりが
どんなふうになるのかな。

日本の近代林業は針葉樹を中心とした皆伐再造林です。つまり、スギやヒノキ、北海道ではカラマツやトドマツなどの樹種を管理しやすいように列状に植えて、施業の際には重機を入れるように大きな林道を通す。そして一気に伐採してその後また一斉に植林していく。これはかなりシステム化されて、その方法論は成熟しきっているようにも見えますし、また、同時に全体的な林業の衰退によって行き詰まりを見せているようにも思えます。

一方で、林業には興味はあるけれども、こうした工業的手法ではない林業をやってみたい、という人は、以前から少なくありませんでした。近年、そうした人々が独自のスタイルで、既存のものとは違う小さな林業を営むケースが見られるようになってきました。

ひとことで「小さな林業」といっても、それがどんなものなのか、どんな人たちがどんな手法でやっているのかはなかなか想像が付きません。今回は家族型の林業家を訪ね、「小さな林業」とは何か、大きな林業とどう違うのかを聞き、日本の林業にどんな変化をもたらすのかを考えてみたいと思います。



CASE:1



合同会社 Hikobayu
(ニセコ町)
澤田 健人さん・佳代子さん

ニセコ町で林業を始めたという澤田健人さんと佳代子さん。民有林や町有地の森林の管理のほか、庭木伐採や後進の指導にもあたっています。一番の特徴は、トドマツ原料に製品をつくっているところ※。精油や精製水、キャンドルなどのラインナップでニセコの森の魅力を発信しているほか、修学旅行生を森に連れていってさまざまな体験を提供するなど、直接森の良さを伝えることもしています。そんなお二人に話を聞きました。

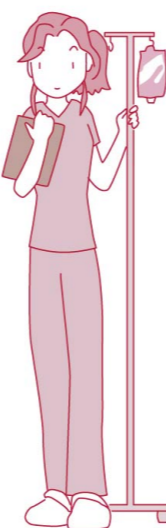
※トドマツの精油については12ページで詳しく紹介しています。

Q 林業をはじめたきっかけについて

ニセコに来るまでは、健人さんは美容師、佳代子さんは看護師をして働いて、二人とも林業とは全く関わりがなかったとのこと。健人さんはカナダで美容師の腕を磨いたほどの腕前。一見遠い世界の話なのですが、この経歴が森と繋がるひとつのきっかけでもあったそう。

紆余曲折あってニセコの地域おこし協

力隊となった二人、健人さんが美容師をしていたことから新しいシャンプーの開発を目指し、その素材を検討していたところ、地元のトドマツに行き着きました。しかし、林業の衰退で町内には林業会社はなくなって、誰に協力を求めたら良いかわからない。そこで役場に相談するうちに、小規模な林業「自伐型林業」というものを知り、さまざまな人と出会う中で、自分たちも林業をやることになったのだそう。そこで山に捨てられてしまう林地未利用材であるトドマツの枝葉から精油を取れるのではないかとはいままでの精油づくり。



現在はHikobayuという会社を立ち上げ活動しています。

Q 林業だけで食べていくのは可能なのか

仕事としては森林の管理の他にも、健人さんと佳代子さんは今でもそれぞれ美容師・看護師の仕事をしているほか、ガーデンハウスの管理や持続的な観光に関わる会社、それから町と協力して自伐型林業の指導を行うなど、多くの活動をしています。基本的には、佳代子さんはトドマツ精油を、健人さんは林業関係を担当していますが、林業一本ではないし、それを目指しているということでもないとのこと。

林業としては、農水省の農林山村多面的機能発揮対策交付金という交付金制度を使って道をつけ、間伐などの森林管理を行い、間伐材の薪販売と精油やそのほかの仕事の合わせての合計収入ということになるので、やはり小さな林業ひとつでやりくりするのは簡単ではないようです。



Q 小さな林業のよいところは

従来の、皆伐再造林は社会にとって必要です。ただ、こうした小さな林業があることで多様な森づくりの選択肢ができる。100年、200年先を考えた林業というのを実践できるということも魅力だそうです。また、森に道をつけるこ



CASE:2



合同会社 木もく連
沼田 とうとこ とうとこ
(沼田町)
寺木 悠人さん・佳奈さん

地域おこし協力隊で2019年に沼田町に入り、自伐型林業の研修を受けて、「合同会社木もく連」を立ち上げ、林業を始めた寺木さんご夫妻。ともに現役の研究者であるというところが一番の特徴です。

林業をやっているのだから森林関係の研究者でしょ？ いいえ、全然違うんです。二人ともそれぞれ違う研究をしているし、森林や林業とも関係ない。その研究者がなぜ小さな林業をはじめたのか、その中に何を求めているのかを聞いてみました。

Q 林業をはじめたきっかけについて

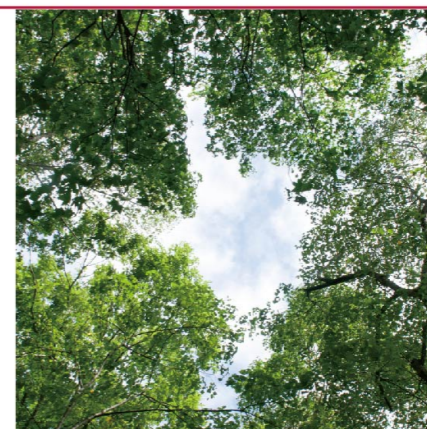
寺木さんご夫妻は研究者。妻の佳奈さんは地域研究という分野で、タンザニアでフィールドワークをしていました。もともと森という環境が好きだったこともあり、こうした研究を経て森林や自然に関わる仕事と、それをベースにした研究をしたいと思ったのです。一方、夫の悠人さんの専門はなんと宇宙物理学。特に森や自然に

関わる仕事に興味があったわけではなかったのです。

今は大学では挑戦的な研究をする時間がありません。そこで二人は大学を出て旭川で教員を勤めながら研究を続けようとなりましたがうまくいかず、よりよい環境をもとめて、沼田町の地域おこし協力隊に応募しました。その中で、佳奈さんは一次産業に近い自然に関わる仕事とそれに関わる研究テーマを模索していて、そこで自伐型林業の講習会に参加したことで小さな林業をすることを決意したのだそう。でも一人で林業をすることは難しく、夫の悠人さんも一緒にやることに。悠人さんとしては、研究の時間を確保できて、面白い仕事できればよかったのだそう。

Q 林業だけで食べていくのは可能なのか

仕事としては、町有林の管理や庭木伐採などで収入としています。森林管



理で出した間伐材は町から買取り、薪に加工して販売しているのだそう。原油高の影響もあって薪は収入の大事な柱になっているとのこと。それでもやはり農水省の農林山村多面的機能発揮対策交付金の制度を利用しないと生活していくのは難しいそうです。地域の複数の林業家で作った「沼田とってこどってこ」は、もともとそのため団体なのだとか。



その他に「森の輪」※の製作を請け負うなど木製品の加工をし

※「森の輪プロジェクト」が新生児に木のおもちゃを届ける活動。詳しくはモリイクvol.23で紹介しています。

たり、修学旅行生が宿泊する林家民泊に参入したりと、仕事の幅を広げています。家族の生活ができるレベルの収入は確保しているけど、機材の修理費などを念頭に置いた売り上げを得るにはあともう一歩、と悠人さんは話してくれました。



Q 小さな林業のよいところは

こうしたスタイルの林業の寺木さんお二人にとっての一番の利点は時間が自由になること。自分の研究が目標のお二人にとっては、時間の融通を聞かせることが何より大切です。

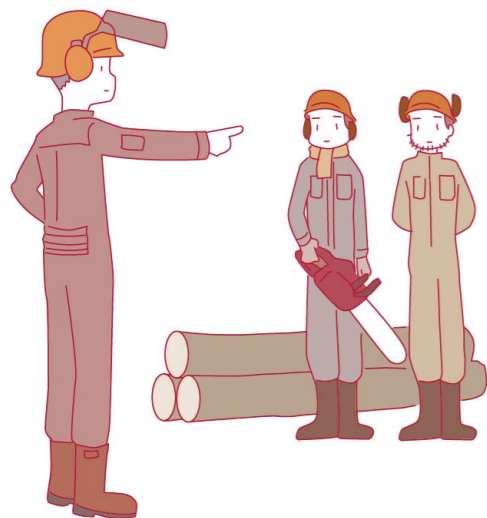
また、大きな林業用の重機が必要ない

CASE:1

とで人が入れる森になるということも大切で、自伐型林業による施業では、道がいたり間伐を行うことで人に心地よい空間が生まれるのだとか。そうした森林空間ができることで人と森がコミットする場が生まれ、人と森のつながりを生み出せる、ということも、こうした小さな林業の利点であり、大きな目標なのだそうです。森に入って楽しい、そう感じられる原体験を作っ

Q 小さな林業の目標値について

健人さんは、もっぱら自分で林業をする、というよりは人材育成に重きを置いているといいます。それは、今は自伐型林業の裾野を広げることが大切だと考えているからです。後進の育成はまさに小さな林業の拡大に直結することになります。また、施業によって生まれる心地よい森林空間は、木を伐らなくてもキャンプ場のようにお金を産むことができます。それは大きな林業にはできないことだし、今は子育ても大変な時期なのですぐには手が出せないけど今後やっていきたいとのこと。そうしたソフトの活動も期待できることが自伐型林業のおもしろいところかもしれません。



自伐型林業を行う林業家は少しずつ増えていますが、こうした林業の広がりは国の政策的な部分にも影響も与えるだろうと健人さんはいいます。今までは従来の大規模林業だけが対象でしたが、小規模の林業にも予算がつくようになり、経済性が認識されれば市場の整備などにも必要になるでしょう。そうした展開も期待しているのだそうです。

ところで、お二人の会社、Hikobayuの柱としているのはトドマツの精油づくりです。こちらはどんなビジョンがあるのでしょうか。健人さんは「森と人をリンクすること」に香りは最適だといいます。森から離れたところでも森を感じることができる、そこから森に関心を持つ人の裾野を広げて森の大切さやその恩返しの気持ちを知ってもらいたいといいます。

また、佳代子さんは、トドマツの香りを通して森とのつながりを思い出して欲しいといいます。分断だらけの世の中だけ、

記憶のどこかに刻まれた森とのつながりを、香りから思い出してもらいたいと話してくれました。

自伐型林業という、小さな林業をベースにしながらも、トドマツ精油の製品づくりや人材育成、森林空間の活用など、さまざまな方向性で森の魅力を発見し、伝えていく澤田さんの森づくりは、きっと森が持つたくさんの魅力を広げて私たちが手に取りやすいように見せてくれているのではないかと思います。



小さな林業がもたらすもの

自伐型林業に代表される「小さな林業」。そのアプローチについて、2つの家族型林業家のケースを見てみました。どちらも異なる目標や目的があって、異なる方向性で林業を進めていることが印象的です。たとえば大きな林業会社に所属した場合は、こうしたスタイルの差は生まれ得ないでしょう。さまざまなあり方があり、その多様性を担保できるのが小さい林業という形態なのではないでしょうか。

また、小さな林業ゆえに達成できる自己実現もあるのかもしれない。今回お話を聞いた澤田さん、寺木さんご夫妻は、林業というベースを共有しているながらも4人それぞれでやりたいことが異なっています。そうした異なる目標を内包し、自己実現へと導くことができるのも小さな林業ならではのことでないでしょうか。

CASE:2

ということもメリットになっているとのこと。高価で大きな重機があれば便利だけど、買った金額の分稼がなきゃいけない。それは足枷になってしまいます。ガンガン稼ぐよりも自由な時間を持っていることの方が大切。「これだけの仕事(ノルマ)をしなきゃ」という敷居が低いために、参入しやすいというの也不错。

大きな林業が得意なのは平らな土地、単種で直線の植林と大規模林道。生態系や地形の複雑さは排除した方が適しているといいます。でも急峻で複雑な地形が多い日本では適さない場所もあり、そこに入るのも小さな林業の特徴です。

Q 小さな林業の目標値について

寺木さんたちが行う小さな林業は、その土地や気候、自分の技術や機材に合わせて臨機応変に施業する力が求められるのだそう。つまり、発生するさまざまな状況に

ついて自分で考え、対応する力が問われるということ。逆に、それが面白さでもあるそうですが、こうした小さな林業は、自分たちで考え、本質を理解し、問題を解決する力をつけることにつながる、と悠人さんはいいます。それは、情報があふれて何が本質が見えにくいような現代社会においては、ますます大切なスキルになっているとも思えます。実は失敗を重ねて仕事を学んでいるというお二人、マニュアルに書いてあること



よりも体験を積み重ねて、そこから学び取ることの大切さを話してくれました。

また、もうひとつのポイントは自分たちの自由になる時間をつくれるということ。「半林半X」という生き方を選択できる。そういう、生活に仕事以外のもうひとつの軸を持っている人が増えると、世の中は変わるし面白くなる、と話します。

実際、お二人は研究の時間を持っているのでしょうか。佳奈さんは仕事がまさに研究の一部で、人と自然の関係について興味深い事例を得ることができているそうです。悠人さんはある程度研究の時間を持っているものの、ゆくゆくはもっと増やしていきたいとのこと。実は子育て中でもある寺木さん、子どもと一緒に過ごす時間も大切にしています。この仕事のスタイルのおかげで悠人さんは子どもとサッカーをする時間を持っているといいます。子どもの

成長は早いので、「今しか楽しめないこと」もあるでしょう。自分が大切にしたいことをする時間を生活の中に持つということは、寺木さんにとって最大の目的なのです。

今後の森づくりについては、交付金の受け皿として設立した「沼田どってこどってこ」を使って人と森がインタラクティブする活動を考えているとのこと。森にいてってなんか楽しいよね、そういう部分から始めて、自分なりの遊びを考えて発見したり、さらには道をつけたり森づくりをしたり、より深く森と付き合ったら楽しいだろうとのこと。そこはやはり森に人を呼んでこそ森づくりといえるのかもしれない。

自然の仕事をしたいという希望に加えて自分たちのライフスタイルとフィットする、という意味での小さな林業を展開する寺木さん、森の側ではなく、「自分らしさ」という目線の森づくりという選択もあるのだと教えてくれました。

「自伐型林業」は、小規模ならではの小回りの利く森林管理で、長期間にわたって小さく利益を出し、よい森を育てて最終的には高価な木材を産出できるようになる、個人でもできる理想的な山林資産の育て方とされています。しかし森を育てるには100年単位の時間がかかるので、必要な金額を稼ぎ出すのは簡単ではなく、多くの小規模林業家は、林業単体ではなく、間伐材を薪に加工して販売するなど、収入源の確保に工夫をこらしているようで、作業の効率化や収入の安定化は課題とされているところ。

ところで、澤田さん・寺木さんともに森と人をつなぐことを目標のひとつとしていて、森でのイベントを計画するなど、人に来てもらい、接してもらおう機会を作っていることも注目したいところ。これは、自伐型林業のような小規模林業が、結果として人が入って心地よい・入りやすい森をつくっているということでもあります。実際に澤田さん、寺木さんが整備した森の小径を歩けば木漏れ日あふれる明るい森となっていて、森にいることの幸せを感じることができるのです。

従来の大きな規模の林業は経済と暮らしを支える大きな役割をはたしています。しかし、それとは別に、こうした森づくりをする人が少しずつでも増えて、多様性の豊かな森が増え、あちこちで人が入れる森が増え、森に入るとは森と社会のことを考える人が増える。それは、この先の世界に、小さな林業がもたらす大きな未来であるように思うのです。✦



癒しのある日々のために

薬 Hikobayu

「あっ、雨上がりの森の匂いだ」と感じたのはトドマツのエッセンシャルオイル「ミスティフォレスト」をテストさせてもらった時。ユーカリや青森ヒバなどとトドマツの精油のブレンドとのことですが、トドマツの森に踏み入れた時の記憶の風景がぱっと浮かんで、森に入ったときのような癒しを感じたのでした。

森の癒しをたくさんの人に届けたいと、ニセコでトドマツ精油を作っているのは「薬(Hikobayu)」の澤田佳代子さん。前のコーナーでもご紹介したとおり、夫婦で地域の林業を担う活動をしていて、佳代子さんはトドマツの精油づくりを中心に事業をしています。

「はじめは美容師でもある夫のシャンプーの原料探しがきっかけです。地元ニセコの原料を探しているうち、林地未利用材として捨てられてきたトドマツの枝葉に行き着いたんです」と話す佳代子さん、夫や地域の仲間とDIYで蒸留装置を製作して始めたのだそうです。手作り、手探りの抽出でうまく精油がとれているのかは自信がなかったため、大学での成分分析などを経て製品化を進めたとのこと。今では200リットルの大きな蒸留装置を2機(やっぱりDIYで)作って精製を行っています。

製品のラインナップは、精油のほかに

アロマスプレーやアロマキャンドルなど。それぞれ特色あるブレンドで配合され、トドマツのピュアな香りを楽しめる「エーセリアル」やリラックスを促してくれる「ラベンファー」、柑橘の香りが爽やかな「ユズ」などの豊富なバリエーションがあり、好みの香りを探すのが楽しくなります。普通のアロマオイルやミストとして使う他、最近ではサウナからの引き合いもあるそうで、ニセコのホテルや札幌のサウナ施設でも取り入れられているのだとか。「香りは記憶を呼び起こすといわれています。だから、癒されるのと同時にニセコに行った時のことを思い出してもらえたらいいな」と、佳代子さんは話してくれました。トドマツ精油の成分は有害とされるNOx、SOxと結合することが分かっていて、その効果からスギ花粉症を軽減することも期待されています。また、イギリスではアロマセラピーは代替医療として研究が進んでいることもあり佳代子さんも、癒しだけではなく、実際の医療につながる可能性も学んでいきたいとのこと。

今は2人の子どもを育てながら仕事を続けている佳代子さん、今後も人を癒し、つながる仕事をしていけたらと話します。「たとえば障がい者雇用みたいなところとつながれるのかもしれない。サウナで使う、シラカンパの枝を束ねた

ヴィヒタを作ったりとか。福祉施設の利用者さんたちと一緒にできるかもしれないし、雇用も増やしたい。将来は仕事を人に任せて、自分は別の人の役に立ちそうなことをしていきたいとのこと。

癒しのために森からできることを届ける、その最初の一步が精油なのかもしれません。森の可能性をもっと広げる活動、これからも楽しみです。🌲



Hikobayuの商品ラインナップ。いろいろ楽しめるよう、幅広いバリエーションのブレンド(上)。精油は大きな蒸留施設。なんと手作り(中)。森の癒しをどこでも思い出しで欲しいと澤田佳代子さん(下)。

合同会社 Hikobayu
<https://www.hikobayu.com/>



大きな木の小さな物語

② クリ

クリは高さ15~20mほどになる落葉広葉樹です。日本全土に分布するほか朝鮮半島中南部にもあります。ただし北海道での自生地は南西部を中心に、北は空知や上川地方の一部まで、東は日高山脈を越えることはありません。

クリ属は北半球の温帯に10種ほどあり、実は各地で古くから食用として重用されてきて、栽培用の品種も多くあります。

日本では、青森県にある三内丸山遺跡で太さ1m・長さ10mほどのクリの柱の基礎部分が発掘されています。縄文時代前期~中期(現在から約5,900~4,200年前)の遺跡です。遺跡を調査したときの花粉分析から当時集落の周囲の森にはクリが多くあることがわかり、さらにDNA解析からそれらは栽培されていたものと推定されています。

ところで、クリのイガは何のために?

「動物に食べられないように」という答えが多そうです。でも、クリは熟すとイガが4つに割れて実が下に落ちるので、動物に食べられないようにするためではありません。虫から実を守るため、が答のようです。ゾウムシの一種クリシギゾウムシのメスは、イガがまだ緑色をして柔らかいうちに物(ゾウムシの口)でイガと実の皮に穴を開け、卵を産みつけます。卵はクリの実の中で孵化して成長します。だからイガがあっても100%虫から実を守ることはできないのですが、もしイガがなかったらもっとほかの虫たちも同じような行動をとってクリに被害を与えたいと考えられています。

では、そのイガとは何か。もともとは総苞です。花の根元にあって花を抱くように小型化した葉を苞といい、総苞はそれらの集合体です。雌花には柔らかく先が尖った総苞が見られます。これが熟すとともに硬いイガになっていくわけです。形態学上殻斗と呼ばれ、ドングリの帽子と同じ扱いになります。

そろそろです、クリ拾いに行ってみませんか。🌲

まだ緑のイガ(7月下旬)

熟してきたイガ(9月下旬)



text/images 孫田 敏

「54年山形県長井市生まれ。'77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。'90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士(建設部門・建設環境)。著書:アトリウムと植生(積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計:絵内正道編著)、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方(水辺域管理-その理論・技術と実践-:砂防学会編)、森林管理と市民参加(北のランドスケープ 保全と創造:浅川昭一郎編著) WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>



特別編...
 森林のキモイナレ...
 野生動物との距離を考えると

北海道にとっての外来種もいるよ

入れない
 捨てない
 広げない

3つの約束

知らず知らずにやっているかも?

「外来種」ってなんだろう？
 よくない生きものなの？

飼っている生きものを放したり、荷物につついて来るなど、人間の活動によって、もともと生息していなかった場所に居ついてしまった生物のことを「外来種」と呼びます。外国から来たものもあれば、国内の他の地域から来た「国内外来種」もあります。渡り鳥や海流によって移動する魚など、自力でやって来るものは外来種ではありません。

北海道の生きものには毒になるカエルの国内外来種

北海道にもともといるカエルはエゾアカガエルとニホンアカガエルだけ。でも最近は道外からカエルが入り込んで、いろいろな問題が生じています。

北海道の中西部、南部で増えているアズマヒキガエルは毒があり、人の目や口に入ると、炎症を起こしたり体調を崩す恐れがあります。さらに、この毒は卵やオタマジャクシにもあるので、北海道在来種のエゾアカガエルやエゾサンショウウオが食べて死んでしまうことがあり、

問題になっています。でも、アズマヒキガエルのもとの生息地、本州・東北地方では、その土地にすむヤマアカガエルやクロサンショウウオが食べて死ぬことはありません。耐性があるのかも？

このように、本来の生息地では何ともないのに、新しく棲みついた場所では重大な被害が出る可能性があるのです。



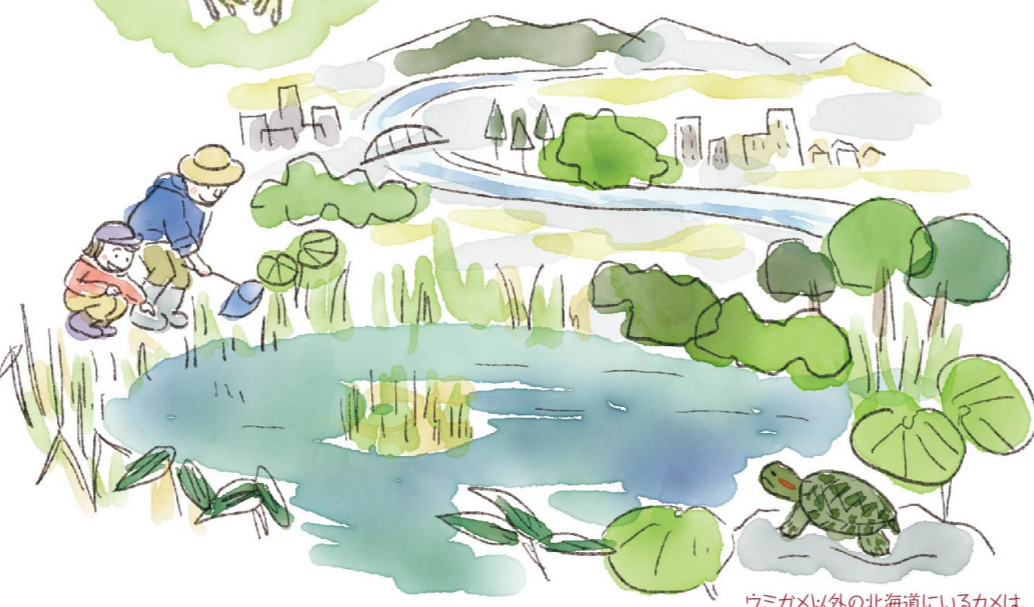
ほくたち北海道の在来種

あたしは北海道では国内外来種なの



北海道のカエルをさがそう！
 北海道カエルたんけん隊

<https://kaeru-rakuno-hub.hub.arcgis.com/>
 北海道にはもともとどんなカエルが生息しているのか、みんなの近くに外来種のカエルが生息していないか。鳴き声や特徴を紹介しているよ。



ウミガメ以外の北海道にいるカメは、みんな外来種なんだよ



決して外来種は悪モノではないのですが、ヒアリ、セアカゴケグモのように人間の健康に被害を与えるものや、エサや生息地を奪って在来種(その土地に元からいた生物)を減らしてしまうものなど、大きな影響を及ぼすものもあります。もとの生態系が壊れることで、人間に被害が出る心配もあり、かわいそうですが防除が必要な場合もあります。

ペットや飼育した生物とは一生付き合っ！

生きものを近くで観察することは大切なこと。でも、「カエルの卵を持って帰って育てたら、大量のオタマジャクシとカエルに育てて手に負えない！ 近所の池に放しちゃう」という経験をした人がいるかもしれません。

この時、卵を取った場所以外で放すことは絶対にダメです。たとえ同じ種のカエルが住んでいても、遺伝的な違いがあるかも。元の場所に返したとしても、飼育中に病気に感染し、その病原体を広めてしまうキケンも！

生きものを飼育前にその種のことをちゃんと調べましょう(絶滅が心配されていないながら不法に輸入された動物など、法律で飼育が禁止されている生きものもあります)。そして、一度飼育した動物は死ぬまで飼育「終生飼育」を心がけましょう。

死んだ時は、土に埋めず、焼却しましょう。かわいそうに思えますが、病原菌などの流出を防ぐため、密閉して可燃ゴミに出したり、ペット葬にするなど、適切な方法をとってください。

飼育環境で出る土、水などもそのまま流さず、消毒してから処理するなどの対策を！
 ※参考：動物園・水族館における「両生類のツボカビ症」対策指針(改訂版1)



白いオシロイ目印
 セイヨウオオマルハナバチ

人気!カワイイ!
 おいしい!役に立つ!
 と、持ち込まれたのに
 困りものになってしまった外来種たち

外来種の中で特に生態系や人間活動への影響が大きい生物は、環境省が「生態系被害防止外来種」に選定しています。北海道では外来種を侵入の程度で分けました「北海道ブルーリスト」を作成しています。こちらのQRコードから見てみましょう。

北海道の外来種について
<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/tayousei/gairaisyu.html>



道内あちこちで見られる
 オオハongoソウ

ペットだったカメやアライグマ、農業のために外国から連れて来たセイヨウオオマルハナバチ、植物では、オオハongoソウやセイタカアワダチソウなど



指があて器用なアライグマ

北海道の爬虫類両生類の調査やアズマヒキガエルなどの防除活動を行っています。外来種は、侵入した地域では状況把握や対策が重要です。そして、まだ侵入していない地域では「もし入ってきたらどうするか」という準備が重要です。どんな生物が外来種なんだろう?、広がらないようにするには?など、みんなで考えてみてほしいな。

北海道爬虫両生類研究会
<https://koke-koke.com/Kamui/>



お話を聞いた人

徳田 龍弘さん

蛇をメインに爬虫類、両生類、野生動物のことを、書いたり、話したり、撮ったり、観察しています。獣医師、北海道爬虫両生類研究会副会長。専門学校で両爬虫学、野生動物学を担当。両爬虫と人のコミュニケーター。著書に「北海道爬虫類・両生類ハンディ図鑑(北海道新聞社)」、「Old world ratsnakes(一章担当)」など。



北海道爬虫類・両生類ハンディ図鑑(改訂版)
 徳田 龍弘 著 北海道新聞社

北海道にすむ爬虫類と両生類全19種を、豊富な生態写真と詳細な解説文、分布域マップで紹介しています。



morinoko



新岡薫 / エトブン社
 北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかけられる。クモはちょっとコワイ。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。
<http://etobunsha.com>



宮本尚 / きたネット
 森好き、ヘンないイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて買った子どもの頃から。最近はキノコのトリコ、シンガソングライター、宮本尚 Song-Garden というバンドでライブハウスなどで演奏しています。
<http://kitanet.org>

春の森で夢のコンサート
～大和ハーブがやってきた～

私たちの森は京極町の人里離れた山奥にある。夫が自分で山を整備したいと言って地元の森林組合を仲立ちにして10ヘクタール余りの山林を購入し、試行錯誤を重ねながら森を育て、早いものでもう20年近い歳月が経った。大型機械もなく、夫婦二人の手作業で遅々たる歩みではあるが、折々に手伝いに来てくれる人たちの力や、降り注ぐ自然の恵みが、人の憩える森にしたいと望む夫を手伝ってくれる。

そんなある年、私たちは京都の郊外に住む親しい友人の紹介で大和ハーブという楽器に出会った。奈良の、古墳のある公園にほど近い緑豊かな土地に工房と教室を構える伊藤忍さんと井藤和美さん、その二人が生み出す音楽に私たちはたちまち虜になった。

大和ハーブはひとりの職人が一から手作りした文字通り唯一無二の楽器である。外見は少し小ぶり、その昔ヨーロッパの吟遊詩人が使っていたといわれるアイリッシュ・ハーブに似ている。弦の数も一般的なオーケストラに使われる大型のハーブと違って少なく、音階を切り替えるためのネジのようなものが付いている。その小さな木製のネジさえ、職人の彼は一つひとつ手作りするそうだ。奏者の側に、ギターのボディのような空洞が作られていて、音が反響する仕組みになっている。抱えて弦をかき鳴らすと、お腹に柔らかく響く、と奏者である和美さんは言う。まるで赤ちゃんを抱っこしてみたい、と。そして彼女はこうも言う。弦も硬い金属の弦じゃないから、弾いても指は痛くならないし、力も要らない。柔らかい弦は音も柔らかくて大型のハーブの華やかな響きはと対照的に、聞く人の気持ちを穏やかにする。

今まで出会ったことのない、やさしい響きを持つ大和ハーブに魅了された私たちは、その音楽が私たちの森で奏でられることを夢見るようになった。人が憩う森を目指している私たちに相応しいと思えたからだ。

そして夢がかなった日。

さまざまな紆余曲折を経て書きたいところだが、コロナ

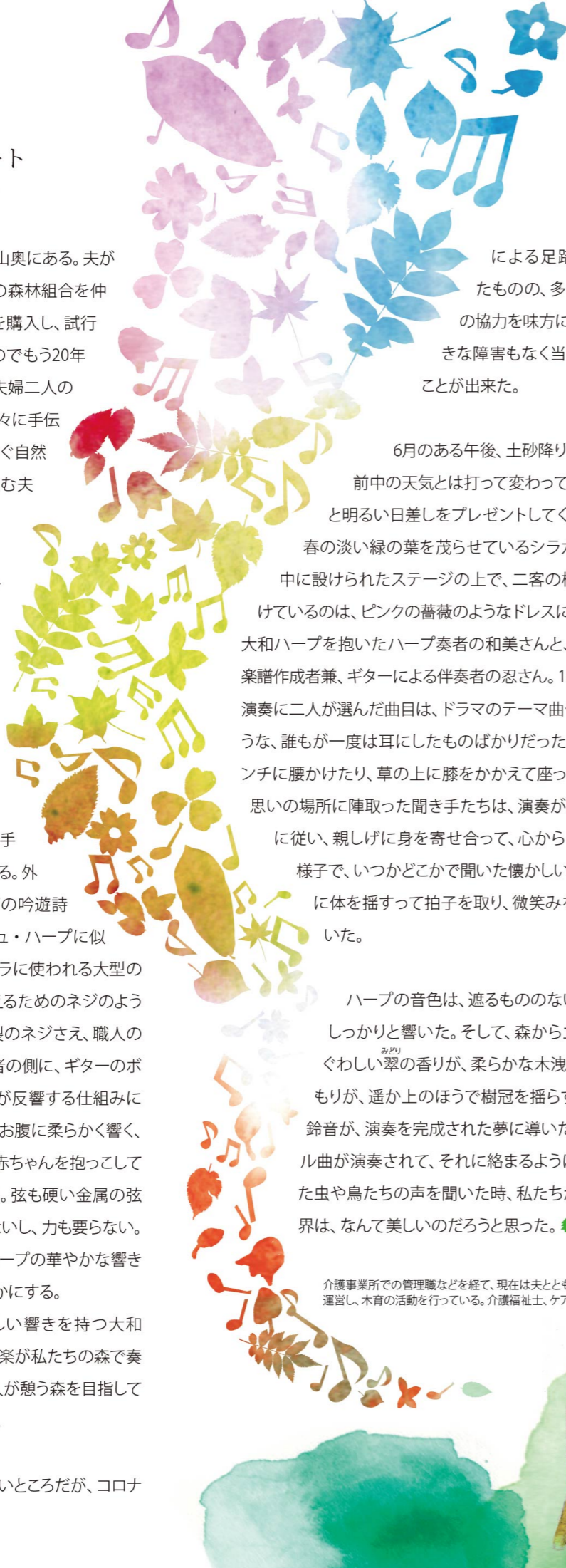
による足踏みはあったものの、多くの人たちの協力を味方に付けて、大きな障害もなく当日を迎えることが出来た。

6月のある午後、土砂降りとなった午前中の天気とは打って変わって、空は青空と明るい日差しをプレゼントしてくれた。まだ春の淡い緑の葉を茂らせているシラカバの林の中に設けられたステージの上で、二客の椅子に腰かけているのは、ピンクの薔薇のようなドレスに身を包み、大和ハーブを抱いたハーブ奏者の和美さんと、作り手兼、楽譜作成者兼、ギターによる伴奏者の忍さん。1時間余りの演奏に二人が選んだ曲目は、ドラマのテーマ曲や唱歌のような、誰もが一度は耳にしたものばかりだった。仮設のベンチに腰かけたり、草の上に膝をかかえて座ったりと思いの場所に陣取った聞き手たちは、演奏が進んで行くに従い、親しげに身を寄せ合って、心からくつろいだ様子で、いつかどこかで聞いた懐かしいメロディーに体を揺すって拍子を取り、微笑みを浮かべていた。

ハーブの音色は、遮るもののない空間でもしっかりと響いた。そして、森から立ち昇るかぐわしい翠の香りが、柔らかな木洩れ日のぬくもりが、遙か上のほうで樹冠を揺らす木の葉の鈴音が、演奏を完成された夢に導いた。オリジナル曲が演奏されて、それに絡まるように鳴っていた虫や鳥たちの声を聞いた時、私たちが今在る世界は、なんて美しいのだろうと思った。

text/ 齊藤 香里

介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『ようてい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。



●ミズナラの枝を剪定しよう

新型コロナをタイミングに活動ができなくなっていたあすもりと札幌市円山動物園の環境教育プログラム「どんぐりプロジェクト」、今回3年ぶりに開催されました。

今回は動物園を飛び出して、当別町の道民の森神居尻A地区の森づくりをお手伝いします。というのも、このA地区に2008年に植えたミズナラは積雪で折れてしまった枝や曲がって這うように伸びる木があって、少し整理してやる必要があるようでした。そこで、森が健康に育つように折れたり曲がったりした枝を剪定する作業をすることに。でもそれだけじゃ切った枝は捨てるだけになってしまいます。そこで、円山動物園の協力で、切ったミズナラの枝をゾウにプレゼントすることになりました。

7月30日は暑い日でしたが、集まってくれたみんなは慣れないノコギリや剪定ばさみを使って曲ってしまった木や折れた枝をたくさん切ってくれました。ミズナラは直径10cmくらいに育っていて、切るのもけっこう大変。これを集めてトラックに押し込むのもちょっと大変。こうしてみんなで剪定したミズナラは円山動物園へ

運ばれたのでした。

●ゾウが食べるのを見に行こう

8月1日、いよいよゾウたちにあげる日です。円山動物園には4頭のアジアゾウが飼育されています。いつもは干し草などをエサとして食べていますが、新鮮な木の枝葉も大好き。こうした木の枝はちょうど良いおやつになるようで、飼育員さんたちの手で立てられた枝を、やってきたパールとシーシュはさっそく大きな音を立てながらおいしそうに食べていました。

ところで、ゾウのうちには食べた植物の種類がたくさん入っていて、ゾウが歩いた先で、うんちをした場所で、芽を出して森を広げているのだそう。アジアゾウは、本来の生息地である東南アジアではその数を減らしています。でもゾウも大切な森づくりの仲間。こうした機会がゾウのことを学ぶきっかけになって、ゾウやゾウの暮らす森を守ることに繋がると良いですね。

森を健康に保つことが目的の森づくり、それがゾウの暮らしにもつながっている。そんな大きなつながりを学んだ今回のプログラムでした。みんな、これからもゾウと森を見守ってね。

ミズナラを食べるパール。8/19に赤ちゃんを出産したよ!



木を切るってけっこう大変!

トラックに載せるのもけっこう大変!



ゾウの食事のことや森とゾウの関係を解説する担当の飼育員さん

Fの森から 森づくり会、開催しました!



6月10日、ひさしぶりに一般の組合員さんの参加者も「Fの森」にやってきて、森づくり会が開かれました。今回からは主催者があすもりからコープさっぽろ東地区委員会に変わります。だから参加人数は50名ちょっと。午前中はミズナラ、シナノキ、トドマツなど300本の苗を植えました。午後からはFの森を歩いてそのあとは植樹予定地のオオイタドリ除去。昨年に行った場所ですが、今年もたくさんおがっています。

やっぱり草抜きはみんな楽しそう。終了時間には一本も残っていませんでした。これを続けるとさしものオオイタドリも弱ってなくなるのでは、と期待されています。Fの森の森づくりはこれからももちろん続きます。年々変化していく様子を、みなさんも見に来てください。



Event Report

森づくり団体交流

小樽地区 森と畑をつなぐ
フォレストガーデンの
森づくり

with 北海道エコビレッジ推進プロジェクト

あすもりが作ってきたたくさんの「つながり」を森づくりに生かしたい。そんな思いから始まった、各地の森づくり団体とコープさっぽろ組合員さんとの森づくり交流、今年も各地で行われています。

雪解けが早く進んだ北海道、春も早い時期から森づくりが始まりました。まだ少し肌寒い4月22日、小樽地区と北海道エコビレッジ推進プロジェクトの団体交流として行われた森づくりに親15名ほどが参加しました。まだ新型コロナの影響があるために募集は限られた範囲でしたが、それでも春の野では楽しそうなみんなの声が響き渡りました。

今回の植樹では、エコビレッジの畑と、その背後に広がる森をつなぐ斜面をフォレストガーデンと名付け、森と畑の間に気持ちの良い木立ができることを想像しながらハルニレ、アオダモ、キハダなど6種類の木を、生態学的混播混植法にならってみんなで植えていきました。

そのあとはエゾエンゴサクが咲き乱れる斜面を歩いたり、エコビレッジの森を歩いて春の野を楽しみました。風に乗って流れてくるエゾエンゴサクの香りがとてもよく薫る日で、子どもたちもオオバユリの種やネズミが食べたクルミの殻などを宝箱に集めたり、歓声を上げて斜面を走り降りたりと、森での時間を楽しんだのでした。

こうしたみんなが楽しむ森の時間、これからも増えていくといいなあ。



今までの植樹と違った活動もしてみたかったです。鈴木さん※の紹介でエコビレッジでも植樹ができて楽しかった！コロナもあって最近の子は家にこもりがち。自然の中での楽しみをたくさん経験してほしいと思います！

斎藤 梢恵さん ※鈴木 玲 手稲さと川探検隊 あすもり企画委員

Report

コープ未来の森づくり基金
2022年度
活動報告・会計報告

今年度もコロナ禍のため一般参加の植樹祭は釧路地区以外中止し、職員・エリア委員による植樹を一部実施しました。総植樹は4,900本(北海道ぎよれんによる植樹も含む)、全道6ヵ所の「コープの森」にて、2,020本を植樹しました。

コープさっぽろ「未来の森フォーラム2022」をオンラインと一部視聴会場を設けて開催しました。森と暮らしをつなぐことを目的に、様々な森づくり市民活動を紹介するとともに、北海道の森の恵み、その森を未来に繋げるために「あすもり」が行っていることを伝えました。その後、「森と街をつなぐ・森と人の距離を縮めるための取組みとは？」についてディスカッションを行いました。

森づくり団体への助成として、高額助成2団体、小額助成17団体に対し308万円を支援しました。また北海道ぎよれんが進める「魚付林植樹活動」に対し1,719,073円(税別)(植樹面積1.15ha、苗木本数2,450本分)を助成しました。

第13回北海道の森づくり交流会は、札幌会場を拠点に道内7会場で開催し、オンラインでつないで「帯広の森サポーターの会」と「NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト」の高額助成2団体よりそれぞれの森づくり活動を発表いただきました。その後各会場にて組合員さんとの交流を行いました。

基金レポート「モリ・イク」は24・25号を発行し、森づくりの交流サイト「あすもりFacebook」も「いいね!」が1,510件(3月30日現在)と順調に推移しています。

2022年度収支一覧

(単位:千円)

	22年度予算	22年度決算	内容
レジ袋積立	22,000	21,552	レジ袋削減の協力積立金
協賛金ほか	2,000	523	協賛金、エコ協賛商品
収入計	24,000	22,075	
植樹森づくり活動	13,000	12,940	植樹・育樹活動、団体交流、ぎよれん植樹
助成金支援	4,000	3,080	森づくり団体への助成
広報・調査・運営費	6,000	5,810	広報誌、調査研究、運営費
支出計	23,000	21,830	

2023年度
北海道のあしたの森を育てる
コープ未来の森づくり基金
助成団体一覧

高額助成(活動案件への助成)

- ✦ NPO法人 北海道エコビレッジ推進プロジェクト (余市町)
- ✦ 帯広の森サポーターの会 (帯広市)

小額助成(団体への助成)

- ✦ 旭山自然調査隊 (札幌市)
- ✦ NPO法人 里見緑地を守る会・どんぐり (北広島市)
- ✦ 当別森林ボランティア「シラカンバ」(当別町)
- ✦ 一般社団法人 楽子森 (札幌市)
- ✦ 森のようちえん(チュブの丘) (岩見沢市)
- ✦ 一般社団法人 北海道札幌南高等学校林 (札幌町)
- ✦ 間伐ボランティア 札幌ウッドィーズ (札幌市)
- ✦ 南かやべ森と海の会 (函館市)
- ✦ NPO法人 サロベツ・エコ・ネットワーク (豊富町)
- ✦ NPO法人トラストサルン釧路 (釧路市)
- ✦ 黒松内ぶなの森自然学校 運営協議会 (黒松内町)
- ✦ 沼田どってこどってこ (沼田町)
- ✦ 森林ボランティア「オホーツクの会」(北見市)
- ✦ 風致林施業の試みプロジェクト (厚真町)
- ✦ ようてい木育倶楽部 (札幌市)
- ✦ 森の輪プロジェクト (帯広市)
- ✦ 認定NPO法人 子どもと文化のひろば ぶれいおん・とかち (帯広市)

Report

各地の森づくりを学ぼう
調査研究交流事業

7月27・28日はあすもりの企画・運営委員や森づくり団体のみなさんとの調査研究事業。これは、道内の先進的な森づくりを視察して学ぼうという目的で行われていて、今回はあすもり助成団体と一緒に学ぼうとお声がけしたのでした。暑い中集まった30名ほどの参加者は、厚真町の「西莖馬搬」と「風致林施行の試み」を27日に視察し、「北海道札幌南高等学校校林」の視察と交流会を28日に行いました。

「西莖馬搬」では馬による事業の実際や課題を学び、ついでに馬たちとの触れ合いにすっかり癒され、「風致林施行の試み」では開拓農家からのすばらしい景観の森づくりとその活用を学びました。次の日の「札幌南高等学校校林」は歴史ある学校林の施業を見学し、その後は森づくり団体のみなさんとの交流会で、あすもりの運営・企画委員と森づくりのさまざまな話題を交換しました。今後も、多くの団体と学びを共有していきたいと考えています。



Present

アンケート&プレゼント

「モリイクvol.26」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
- Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか?
右からそれぞれお選び下さい。

巻頭コラム(P2) 森あそび研究所(P4,5)
小さい林業で生きていく(P6~11)
木づかい(P12) 大きな木の小さな物語(P13)
森のキモイ!キレイ? 特別編(P14,15)
木育エッセイ(P16)
あすもりレポート(P17~19)

- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか?(はい/いいえ)
- Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
- Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

PRESENT!



アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、「Hikobayu」のトドマツ精油をプレゼントします。森の癒しをお家で楽しんでください。どのブレンドが当たるかはお楽しみに。

応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます。

応募締切 10/31(火) 当日消印有効

コープさっぽろ環境推進グループ
〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号
FAX: 011-671-7575
メール: csapmori@sapporo.coop



こちらからもメールできます